

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名

いやなが保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ> 「やさいのおなか」

<テーマの設定理由>

当園の園児たちの散歩コースには野菜畑が点在しており、実っている野菜を見つけると子ども達は喜び、野菜の形状を見て、美味しいだろうかと目を輝かせていた。絵本「やさいのおなか」は子どもたちが大好きな絵本で、実際の野菜と見比べながらよく読んでいた。テーマを「やさいのおなか」と設定し、毎日食べているお米にも興味をもってほしかったため。

2. 活動スケジュール

【6月】テーマ決定 問いの検討、環境デザインの検討、探究活動の実践/1回

・田植え（田んぼの代わりに土を入れたバケツ）

【10月】探究活動の実践/1回

・刈り取った稲を干す。

【11月】探究活動の実践/1回

・稲の様子を観察する。

【12月】探究活動の実践/1回

・脱穀する。

【1月】探究活動の実践/1回

・もみすりをする。もみ殻と玄米を分ける。

【2月】探究活動の実践/1回

・精米する。

【3月】探究活動の実践/1回 活動内容の振り返り・まとめ

・稲の成長や田植えから精米の工程を振り返る。

・玄米と精米した米を比較する。

絵本「やさいのおなか」

【稲をバケツに植える】稲、バケツ、土、如雨露

【稲の収穫、干す】園芸用はさみ、ひも

【稲の様子を観察】稲穂

【脱穀】牛乳パック、笊を受ける敷物

【もみすり】すり鉢、硬式野球ボール

【もみ殻と玄米を分ける】もみすり後の皮と玄米を受けるバット、うちわ

【精米】透明な瓶、子どもが握りやすい細い麺棒

【稲の成長と工程の振り返り】稲の成長や工程の写真

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

私達が食べているお米ができる工程（田植え、収穫、脱穀、もみすり、精米）を体験し、米がどのように実り、私たちはどのようなところを食べているのかを、「お米のおなか」（構造）を楽しみながら探究した。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

- ・バケツへの『田植え』では、べたべたした感触の土に触る経験が慣れてない様子で、苗を土に押し込まずにのせるように植える子が多かった。
- ・毎朝登園の度にそっと触ったり、稲が成長して実っている様子を「立ってるね」と言ったりして、友達や保護者・保育者と稲が成長していく様子を喜んだ。
- ・『稲刈り』では、「茶色くなってるね」「曲がってるね」と、稲穂の様子に言葉や身体で表現していた。稲穂を観察し、「固いね」「つぶつぶ」と、触った感想を話していた。
- ・『脱穀』は、牛乳パックの口を押さえて稲を引っ張るとその力加減が難しかったが、稲が「ポトポト」と落ちる音が面白く、「もっとやりたい!」と意欲的に体験した。
- ・『もみすり』では、もみ殻を除くために、すり鉢とボールで擦った時の「ゴリゴリ」という感触を味わった。粃殻の中から玄米が出てくることを感じ、「お米になったー!」と歓声が上がった。子ども同士で、すり鉢を手で押さえる子、「ゴリゴリ」と擦る子、と分担して行う姿も見られた。
- ・『もみ殻と玄米を分ける』工程では、うちわでバタバタと風を送った。もみ殻がとぶ様子に「すごーい!」「やってみたい!」と歓声が上がった。
- ・『精米』では、瓶の底に入った玄米を細い麺棒でつく作業で、すぐには玄米の色が白くならなかった。自然と「がんばれー!」と子ども同士で励ます姿が見られた。瓶の底に取り切れなかった殻やぬか粉がついていることが観察でき、「ほんとだ」「この中にお米が入っていた!」と実感している様子だった。
- ・稲の成長と田植えから精米の工程を写真で振り返り、玄米と精米したコメの色の違いを比較した。普段食べているお米にするにはたくさんの作業があることを改めて伝えた。「お米もみんなと一緒の命。命をいただいているのだから大切にいただこうね。」と保育者が子どもに話した。



5. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

- ・バケツの田植えから精米までの長い時間をかけて、子どもたちが普段目にする「お米」になった。この探究活動は、2歳児だからこそ、時間があいても前回にやったことを覚えており、意欲的に楽しく取り組めたと感じた。
- ・どの工程でも、子どもたちは「触りたい!!」と積極的に取り組んだ。稲のバケツを玄関に置き、「毎日」稲を目にすることで、成長の変化に気付いたり親子で会話をして親しみを感じる事が出来た。自分の手で稲穂に触れる、脱穀・精米の音を聞く等の五感を通して観察や工程を体験し、玄米と精米を見比べて色の違いに気づくこと等ができた。栽培中の稲がいつも身近にあるという環境とさらに、友達や保育者、保護者の安心できる関係が、少量のお米であっても「お米のおなか」をよく見ようと、好奇心、探究心につながったのではないか。
- ・子どもたちが「扱いやすい」道具や方法、子どもたちの探究心を満たす準備など、チームで環境を検討を重ねたことで、子どもがより一層楽しさを味わう経験ができた。